

2014年5月9日 発行

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

二〇一四年四月の「森三郎の作品を読む会」では、「堺騒動」(筆名 中村吉麿) を読みました。
『赤い鳥』昭和7年11月・12月号
昭和8年1月号初出(二号連載)

「堺騒動」とは、国史大辞典に「堺事件」として、「明治元年二月十五日(一八六八年三月八日)、堺警備の土佐藩兵とフランス水兵との衝突事件。」とある事件のことである。(「明治」はこの年、九月に改元。)

あらすじ 森三郎のこの話は、(実話)として、三号連載で「赤い鳥」に載っている。

11月号は、旅行免状を持たずに堺の町へ上陸したフランス水兵に対し、土佐藩の六番隊長箕浦猪之吉、八番隊長西村佐平次が帰艦を命じるが言葉が通じず、つかまえようとした事件の発端から、フランス水兵の乗るボートとの撃ち合いで、フランス兵が十三人死んだこと、フランスの公使レオン・ロッシュ側から、謝罪と損害賠償の要求があり、フランス兵を射殺した部隊の兵二十名を処刑することに決まったこと、その処刑者を稲荷神社神前でくじで決めたことまで、事件のあらましが書かれている。十二月号では、処刑されることになった者たちが罪人のように「打ち首」などで断罪されるのではなく、国のため、藩公のために命を差し出す者として、切腹を願って聞き入れられること、翌一月号は、フランス公使レオン・ロッシュ等の臨席の場で、日本人の士気を表す覚悟で六番隊長箕浦以下順に切腹すること、ロッシュはその場にいたたまれなかったか、途中で退席、結局処刑はそこで終了したこと、堺のお寺には亡くなった十一人の為に十一基の石碑(「御残念さま」と呼ぶ)がたっており、あとの九人が入らなくて済んだ大瓶(「生運さま」と呼ぶ)が、本堂の縁の下に伏せてであると書かれている。

感想 公使ロッシュは、土佐藩士の身命をささげて国家に奉公する義勇には感服するが、ああした残酷な切腹を目撃するにしのびないと言って、処刑を中止させている。確かに切腹の場面の描写は、リアルに過ぎ、途中読み続けるのをやめたくもなかった。

作品執筆の1932(昭和7)年は、1931(昭和6)年の満州事変勃発から33(昭和8)年の国際連盟脱退、この先、日中戦争・太平洋戦争へと向かう時代である。当時の男の子たちの中には戦争熱にあおられて、国の為に身命を差し出す話を夢中で読んだ子どももいたかもしれない。しかし、今までの森三郎さんの文体や表現方法とは異質なものを感じた。

実は森銑三さんも、大正十三年の一年間、新聞『新愛知』に連載の「偉人暦」二月二十三日の項で「堺事件の十一士」を取り上げている。(森銑三著作集続編別巻)しかし、さらに遡って、大正三(一九一四)年、森鷗外が「堺事件」を表している。しかも、両者を比較してみると、森三郎のこの「堺騒動」は、鷗外の「堺事件」を紹介した作品と言える。構成や人物描写などはほぼ同じで、難解語句を言い換え、詳細に過ぎる人物関係や名前などの省略をし、子ども向けに書き直したものと思えない。

酒井晶代氏も「三郎は戦争中もほとんど時局的な作品を書いておらず(刈谷図書館協会記念講演「森三郎生誕百年について」)と言っている森三郎さんが、なぜこの作品をこの時期に書いたのであろうか。時代の雰囲気と全く無関係に書かれたものではないような気がするが、どうであろうか。この後の作品の傾向も確認しながら、注目していきたいと思っている。

◎ 次回予定 6月13日(金) 午後1時〜3時

『赤い鳥』昭和8年1月号初出作品

「赤鬼青鬼」・「梅の木」(森三郎童話選集 かささぎ物語)所収

◎第2回「森三郎に親しむ集い」のご案内

日時 5月25日(日) 午後一時〜四時 (開場 十二時半)

会場 刈谷市社会教育センター ホール

♪ 森三郎の世界を お楽しみください。 ♪